

平成29年度 第1回帯広市総合教育会議

1. 平成30年1月31日水曜日 13時30分 ～ 15時
総合教育会議を帯広市役所10階 第5B会議室に召集する。

2. 本日の出席者

帯広市長	米 沢 則 寿
教 育 長	嶋 崎 隆 則
教 育 委 員	田 中 厚 一
教 育 委 員	藤 澤 郁 美
教 育 委 員	佐々木 しゅり
教 育 委 員	塩野谷 和 男

3. 本日の議事日程

(1) 経過報告等

平成29年度帯広市における教育関連の主な取組経過

(2) 協議事項

(仮称) 帯広市立小中学校適正規模の確保等に関する計画(原案)について

米沢 市長

本日は大変お忙しい中、本会議にご出席いただき誠にありがとうございます。また、各委員におかれましては、日頃から教育はもとより、帯広市のまちづくりにご尽力を賜り、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。本日の会議でございますけれど、今年度の経過報告の後、現在策定を進めております帯広市立小中学校適正規模の確保等に関する取り組みについて意見交換を行います。少子化の進行に伴いまして、児童生徒数が減少し、小中学校において人間関係の固定化、集団活動の制限など、小規模化に伴う様々な課題に対応するため、地域の実情に応じた学校教育の在り方や学校規模を検討する必要があります。加えて学校施設は防災、スポーツ、文化、地域の交流の場など、地域コミュニティの拠点として様々な機能を併せ持っており、適正規模の確保にあたっては、地域の皆さんと一緒に検討を進めていく必要があります。本日は、子どもたちにとってより良い教育環境の確保につなげていくため、教育委員の皆さんの幅広い視点から忌憚のないご意見をお願いいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

事務局
嶋崎教育長

続きまして、嶋崎教育長からご挨拶をお願いします。

それでは、私からも帯広市総合教育会議の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。現在、国における教育を取りまく環境としましては、小中一貫教育制度や義務教育学校、コミュニティスクールを導入する自治体が増加するなど、義務教育における既存の枠組みが変わりつつあります。また、次期学習指導要領では、道德の特別教科化や小学校の外国語教育の充実といった動きもでてきております。また、本市では、エリア・ファミリー構想も8年を経過し、全14中学校のエリアにおいて、様々な工夫を凝らした活動が継続的に行われており、子どもたちの生きる力を育むための幼保小中の綿密な連携が深まりつつあるところでございます。先ほど、市長のご挨拶にもありましたけれども、人口減少社会が進行していく中、社会状況の変化に応じた教育環境の整備につきましては、私ども教育委員会に課せられている喫緊の課題と認識してございます。施設の老朽化といった側面なども考慮し、複合的に検討していかなければならないと考えております。本日の協議事項であります小中学校の適正規模の確保等に向けた取り組みでございますが、意見交換会でも様々なご意見を頂戴してございます。改めてそれぞれの学校の歴史の重みや地域との結び付きの強さを感じたところであり、丁寧に進めていかなければならないものでございます。本日の総合教育会議

では、米沢市長を交えて各委員には様々なお立場からご意見をいただきたいと考えてございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

事務局
米沢 市長
福原調整監

以後の議事進行は米沢市長にお願いします。

それでは、経過報告等につきまして、事務局からお願いします。

平成 29 年度帯広市における教育関連の主な取組経過のうち、学校教育部が所管する事項につきましてご説明いたします。お配りしております資料 1 をご覧ください。8 月ですが、平成 30 年度から小学校で使用する「特別の教科 道徳」の教科用図書を採択してございます。次に、本日の協議事項でもございます帯広市立小中学校適正規模の確保等に関する計画(原案)を策定したところでございます。9 月の欄をご覧ください。適正規模の確保等に関する取り組みにつきましては、その後、9 月から 10 月にかけて、保護者や地域住民等を対象とした意見交換会を実施してございます。2 月の欄をご覧ください。対象校を選定した帯広市小中学校適正規模の確保等に関する計画(案)を策定する予定でございます。戻りまして、11 月には点検・評価報告書の取りまとめを行ったところでございます。効果的な教育行政の推進を図り、市民の方々への説明責任を果たすため、帯広市教育基本計画の個別目標、基本方向ごとに実施し、取り組みの成果と今後の方向性の 2 つの観点から実施したものでございます。また、例年開催してございます教育懇談会について、今年度は「心を育み 学びを広げる読書」をテーマとして、市内 4 会場で開催し、読書の目的や重要性、学校の取り組み、図書館のあり方などについて懇談を行い、市民の方々から多くの貴重なご意見をいただきました。12 月には、小学校区と中学校区が整合していない地域のうち、一部の地域について、来年度に向けて通学区域の見直しを行ったところでございます。そのほか、表の枠外に記載しておりますが、小中学校の取り組みといたしまして、6 月から 2 月にかけて、小学校 11 校、中学校 6 校、計 17 校で公開研究会を開催してございます。教育実践の過程を広く公開し、参加者の意見や評価を授業改善につなげ、指導力の向上を図るものでございます。なお、主な取組経過のほかに、次のページ以降に食育やふるさと給食などの教育に関連した新聞記事を参考資料としております。学校教育部からは以上でございます。

草森 部長

引き続き、生涯学習部が所管いたします事項についてご説明いたします。始めに 6 月、宮本商産旧本社ビルが国の有形文化財に登録

されました。本市で2例目となります。このビルは大正8年、1919年に店舗兼住宅、事務所用として、木骨レンガ造り2階建てで建設され、戦前の帯広の繁栄を伝える良質な事務所建築として評価されたところでもあります。現在は所有者である宮本商産様におきまして、モダンな雰囲気を生かしたビアホールなどのイベントに活用されております。次に教育委員と社会教育委員との相互の意思疎通を図ることを目的とした懇談も行っております。平成27年度から28年度にかけて社会教育委員会会議において取りまとめました「地方創生時代における社会教育の役割について」をテーマに開催をし、「自己教育と相互教育」や「少子・高齢化社会における社会教育への期待」など、幅広い視点で意見交換が行われたものでございます。7月の北海道博物館大会につきましては、道内の博物館関係者が一堂に会し、博物館を取り巻く様々な課題等について検討するため、帯広百年記念館を会場に開催いたしました。122名が出席をし、「博物館と情報」をテーマとした研究大会のほか、動物園や児童会館等の施設見学を行っております。次に同月の旧双葉幼稚園園舎の重要文化財指定は、建物として本市で初めての指定となったものでございます。平成22年に国の有形文化財に登録され、園舎の独創的な意匠と、わが国の幼稚園建築における歴史的価値が認められたものでございます。現在は所有者であります日本聖公会北海道教区様におきまして、幼稚園内部公開のイベントなどが行われております。次に12月、第25回オリンピック・パラリンピック冬季競技大会招致に係る対話ステージへの取り組みについて、札幌市長と北海道知事の連名で帯広市に協力要請があったものでございます。本市としては今後、情報交換をすすめることとし、来月には市長が平昌オリンピックを視察する予定であります。次に2月の平昌五輪パブリックビューイングの実施は、オリンピックに出場する帯広市出身の選手や十勝ゆかりの選手を応援するため、オリンピック期間中、NHKと共同で市役所1階に応援する場を提供するものであります。説明は以上でございます。

米沢 市長

ただ今の取り組みにつきまして、委員の皆様からご意見やご感想などをお伺いしたいと思います。田中委員からお願いしたいと思います。

田中 委員

それでは、私から今年度の取り組みにつきまして感想を述べたいと思います。いろいろな教育関連の取り組みをされたということでございますけれど、私は6月に実施されました教育委員と社会教育

委員の懇談について印象が強く残っております。私は教育委員3期目でございます。就任当初に社会教育委員と1度懇談をした記憶があります。今回参加してみて非常に驚いたのですが、社会教育委員長のリーダーシップの下、部会ごとに様々な議論をしているように見えました。この10年積み重ねてきた、委員それぞれの思いの強さの表れだろうと思います。ポイントは自分たちのふるさと帯広をどうやって自分たちの関わり方の中で変えていくことができるか、社会教育委員の立場でお考えになられたのだろうと思います。まちづくりは人づくりだとか、地域活性とか、地域の様々なことはすべて人の考え方から始まるとよく言われることですが、それを具体的に社会教育委員の会議の中で実践されてきたという感じがしました。昔は学校教育と生涯学習がつながっていかないことが課題としてあったと思いますが、現在の計画の中で、帯広においては学校教育と生涯学習が連携を取ると正式に謳われるようになりました。特に昨年あたりから、学校教育はアクティブ・ラーニングをベースとした積極的な子どもたちの自発的、主体的な学習となったときに、学校教育の現場だけではどうにもならないといわれる中で、社会教育や周りにいる大人たちがどう支えていくのかということが社会教育委員の方々の中でも当然課されてきたという印象を持っています。今後とも継続して意見交換の場を設定して、そこで、仕組みづくりや人づくり、まちづくりなどを考えていく場になるのではないかと考えており、とても印象に残っております。感心、感動、共鳴を受けた次第です。以上です。

米沢 市長

今のお話を伺って、良かったと思います。私は8年前に帯広に帰ってきて、まちづくりを担う一端として仕事をしていて、重要なのは主体性だろうと思っています。受身の人の割合より、主体的な人の割合が多いまちが元気なまちになっていくと思います。言葉が社会教育となっていますけれど、まさに主体的な学びを大人たちがどうやっていくのという話だと思います。雑駁な言葉で言えば、子どもは大人の背中を見ているわけで、大人が楽しく働いている姿、働くにあたって毎日学んでいこうという、大人のいろいろな学びの姿勢を子どもが見ることは教育効果が非常に高いだろうと、今の田中委員からのお話に共鳴しながら伺っていました。市長部局で「十勝人チャレンジ支援事業」というのがあります。年間1千万円ほどの予算を使って、1人あたり百万円までで、何かやってみたいということを書いてもらい、見学に行くというものです。例えば、海外の

モッツアレラチーズを作るところを見に行きたいとか、不耕起栽培をしているキューバに行きたいとか、その中には、ポップコーンを作りたいから、ポップコーンを作っている農家に1ヵ月滞在したいという方など、今までに31人いました。この方たちに帰ってきてからやってくださいとお願いしていることがあります。中学校の総合的な学習の時間を使って、自分たちはどんな夢を持っていて、そのために今回こんな見学に行き、今こんなことをしているということを話してもらうことを義務化しています。若い方で、ちょっと年齢の近いお兄さん、お姉さん、彼らから見たらおじさんかもしれませんが、こんな夢を持っている人が地域にいるのを見ることは大きな刺激になるだろうと思いますし、好評だと聞いています。ポップコーンを作っている方は製品化して、去年、北海道知事賞を受賞しています。そういうつながりが出てくるのは、最近、人材確保に向けて、北海道にはこんな面白い仕事があると引きとめようという取り組みがありますよね、これも同じような感じがしています。田中委員もおっしゃったように、社会教育と学校教育のつながりが深まっていくと大変心強いと思います。

塩野谷委員お願いします。

塩野谷委員

私は教育委員1年生です。昨年初めていろいろな行事に参加させていただきました。公開研究会を何校か見せていただいた感想を話したいと思います。われわれの時代と違って、今の公開研究会で感じたことは、知識を得るとか、教えるという授業から、その教材を基にして、皆で考えて話し合うという授業への転換が図られている印象を持ちました。大変良いことだと思います。知識があるだけでは単なる物知りですし、与えられた問題に対しては解決できるかもしれないけれど、将来的にいろいろな場面で得た知識を活用していける学び方が重要ではないかと思います。将来社会に出て仕事をして、いろいろな体験の中で議論し、知識を知恵に変えてそれぞれの仕事や組織に適応し、社会に役立てていくために学ぶ力を養うことが、変化の早い時代の中で、必要なのではないかと思います。私の会社においても、社員の入社後には、学歴は関係ない、学力が重要であるという話をしています。学歴は過去の問題でありますから、これからいろいろな変化に対応していくためには、先ほど田中委員からもお話がありましたけれど、学ぶ力は社会人になっても必要です。公開研究会を見てそういう教育になっているような印象を持ちました。

米沢 市長

ありがとうございます。今お話がありましたけれど、公開研究会の私のイメージですが、会社の中でいうと管理職研修のようなもので、外から受ける研修ではなくて、各部長が自分たちでこんなことをやっているということを報告しながら、他の管理職はそれを見てなるほどこうやっていくのかということに近いのかと思って伺っていました。日本の教育は昔から授けられる形で、プロから聞いて覚えることが主体だったところから、今おっしゃられたように、段々考えるようになり、それを共有していくようになってきた。独断と偏見で発言しますが、学校の先生の場合には、相手をしているのが児童生徒なので対象者の幅があまり変わらない。会社だとおじいちゃんおばあちゃんから子どもまでいますけれど、枠の中でのスキルアップは、自分自身でやろうとすると、難しいところがあるだろうと思います。縦の関係ではなく横に広げてやっていかれること、その姿勢を子どもが見て、先生になったらもう勉強しなくてもいいということではなく、先生も同じく勉強しているんだ、僕らももっと勉強しなきゃという気持ちになることは、とても重要だと思います。私もよく、人間はラベルじゃなくレベルだと言います。先ほど学歴のお話がありましたけれど、どういうレベルに達しているかは重要だと思います。十勝・帯広の先生方の影の自己研鑽が、全国学力・学習状況調査で、わりとポジティブな結果が出ていることにつながっているものと感じています。ありがとうございました。

藤澤委員をお願いします。

藤澤 委員

私からは道徳の教科書採択のお話をさせていただきたいと思います。2018年度より使用されます、小学校の道徳の教科書採択を今年の8月に行いました。道徳が教科化されるにあたり、出版された8社の教科書にはそれぞれ特徴がありました。正直言って大変難しかったです。今までにも道徳の時間はありましたが、教科化されるにあたり賛否両論があったと思われます。子どもたちに評価を付けなければならないことは、先生にとっても負担だろうと思いますし、評価の難しい教科と言えるのではないのでしょうか。考え議論する道徳、心を育てる道徳として、子どもたちに特定の価値観を押し付けない自由で多様な考え方を尊重できる教科書として、十分考慮して採択したつもりでいます。市民の皆さまが教科書を閲覧されて、いただいたご意見も参考にしましたし、教育に熱心な市民の皆様が子どもたちを応援してくれていることを大変うれしく思いました。子どもたちが使用する最適な教科書を採択する責任の重さ、以前に中

学校の教科書の採択をしました。が、道徳という新たな教科ということで改めて責任の重さを痛感いたしました。今年の８月には中学校の道徳教科書の採択がありますけれども、それに向けて、勉強し、真摯に遂行するよう努力したいと思います。

米沢 市長
藤澤 委員

伺っているだけで大変だということがよくわかります。

私には荷が重いところがありまして、やればやるほどわからなくなってきた時もありました。皆さんもそうだと思うのですが、選ばなければいけないことなので、自分なりの考えでやっていくしかないと思いますけれど、選ぶためには、先生方のご意見もお聞きして、これからどのようにやっていくか推測しながら、選ばせていただきました。

米沢 市長

大変ご苦労だったと思います。お話の中にありましたけれど、道徳が特別の教科、評価対象になるということで、日本をあげて色々な議論があったと思います。私自身が個人的に感じているのは、今、価値観が多様化してきて、情報は善も含めて悪意に満ちたものが溢れている。子どもたちが生きていく上での基準や術というのは、なかなか出にくいものですが、基準を持つためのきっかけを作ってあげないと、我々の時から見ても遥かに大変な時代に入っていると思います。倫理だとか、道徳とか、自分の人生を振り返ると、僕の学生時代は、そこは特別の世界で、中途半端に触れてはいけないような空気を感じて生きてきた時代です。でも、今この歳になって考えてみると、もっと早い時期から、言葉は別にして、もっと早く向き合ってこなくてははいけないし、その中に正義であったり、徳があったり、議論した上で、子どもたちが知見や知識などの能力を身に付けた後で、自分なりの人生を送れるようにしてあげなくてははいけない。それに蓋をしてはいけないだろうと感じているところです。いよいよ踏み出した時代に我々いるわけですから、今回の教科書採択は、そういう問題意識で使命感を持って考えると、とても重たかっただろうと改めて感じたところです。大切な問題だと思いますので、こういう中でルールを守ることとか、ルールって何だろう、規範と何だろう、人と人はどうやって一緒に繋がりを持って生きていくのだろうか、結構大変なところだと思います。そういうことを含めて、ここからスタートですけれど、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。

それでは、佐々木委員お願いします。

佐々木委員

私からは 11 月に開催された教育懇談会について感想を述べたい

と思います。今回のメインテーマは、心を育み学びを広げる読書というものでした。私は小学校で図書ボランティアをされていて、図書の整備や朝に絵本の読み聞かせをしています。特にこのテーマは興味があってとても楽しみにしていました。2回参加して、そのうちの1回は図書館でしたが、人数が少なく寂しい思いをしましたが、他の会場にはそれなりの人数の方にお越しいただきました。それぞれ自分たちの子ども時代を振り返ってもらったり、読書と自分の関わりについて、様々な立場からご意見をいただき、大変勉強になりました。常々本をたくさん読むだけで学力が上がっているくらい、子どもたちにとって読書は大事なものと考えています。直接的に読解力が上がるのと、自分で自分の考えを文章に表わすなど、文章でなくても、人に話して伝える能力も、本をたくさん読んでいると自然に身に付いてくると思うので、いろいろな方の話を前のめりになって聞いていました。感じてはいたものの、はっきりと認識していなかったことで、ある参加者の方からいただいたお話なのですが、読書することによって自分の体験していないことを疑似体験できること。自分の実体験には限りがあるので、どんなに豊富な経験をしていても、それなりの経験しか積めないけれど、本を読めば、いろいろな世界に飛んで行ける。いろいろなことを疑似体験できる。しかも、様々な登場人物の様々な考え方が出てきますので、様々な価値観があることを知ることができて、人間性を養う意味でも大事だと思います。どこかの学校の校長先生がおっしゃっていたことなのですけど、それを聞いてなるほどと思いました。どうしてこんなに本を読むのが楽しいのかというと、そういう面もあるのだと、改めて気づかされました。自分が図書ボランティアをしていますが、なかなか気づかないこともあります。他の図書ボランティアの方から、今苦労していることについて、専門家ではないので、本のラックを組み立てたり、並べたりする作業マニュアルなどを市からいただけると、助かるというお話もいただきましたそれと、学校図書館で新聞を購入できたらいいというお話もありました。私が参加していない会場でしたが、後から意見を集約されたものを読んでいて、学校で新聞を読めたら確かに良いだろうと思いました。それから、図書館の開館時間について、もう少し延長してほしいというお話がありました。もしかしたら、現実的に変わっていただけることではないかと思いました。私は子どもにとっての読書と思って参加していましたが、皆さんのお話を聞いていると、大人にとっても、これか

ら読書を始めることはできるし、いつからでも読書の入り口が開いていて、例えば、経営者の方などは、自分の会社の近くに移動図書館のナウマン号を停車させてほしいというご要望もありました。大人の方たちにとっても読書は大切だと思いました。私にとっても本当に有意義な懇談会になりました。

米沢 市長

ありがとうございます。お話を聞きながら、読書の大切さは、この歳になって余計に感じます。読んでいない時期もありましたが、読んでいる本の速さとか、量など人生の中でピークが何回かありました。本を読むと立派な人になると言う気はないですが、本を読まないで立派な人にはなかなかなりづらいだろうと思います。立派な人のほとんどは本を読んでいると思います。子どもたちが読書をすることは、おっしゃっていただいたように、想像力と感受性が間違いなく付くと思うし、生きていく上でとても大切な、相手の気持ちになれるとか、自分以外の人はどんな考えなのか、自分の周りだけでなく、広い世界を知ることができるということもあると思います。佐々木委員のお話の後にどこかで使おうと思っていたのは「言葉」です。本を読むことで言葉にいっぱい出会って、短いフレーズで正しく自分の気持ちを相手に伝えることができる能力は、話すことも大切ですけれど、間違いなく読書と相まってくるだろうと思います。これからはさらに、自分が考えていることを相手に正しく伝える能力がすごく大切だと感じています。大人も含めて、読書ということをもっと啓発していかなければいけない。それに対しての行政としての支援を、先ほどいくつかお話いただきましたけれど、しっかり続けていかなければならないと感じたところです。

最後に嶋崎教育長をお願いします。

嶋崎教育長

最近の話題ではオリンピックがありますけれど、昨年2月に冬季アジア大会には非常に多くの市民の方にお集まりいただいて、参加された選手たちはアジア記録を連発して、それが皆さんの応援もそうですけど、良い記録が出るのは高地ですが、帯広の標高は40数メートルで、帯広のリンクの天井がそれほど高くないので気圧の関係や氷を作る技術があって、あのような記録が出たのだろーと思います。今回のオリンピック招致で、帯広の話が出たのも、去年の歓迎やリンクの良さが高く評価されたことは大変うれしく思っています。観客席の条件とか、いくつかクリアしていかなければならないものがあります。そういったものを仮設で作った時に、氷を作る方たちのご苦労が出てくるだろうと思います。この後、良い形で協

議が整えばうれしいと思いますし、また、費用も相当なものがありますので、市民の方に負担がない形で進めていけたらいいと考えています。

米沢 市長

今のお話のように、いろいろな歴史や積み上げてきたノウハウなど、アジア大会のボランティアの皆さんなど、いろいろなものがあるって候補になっていると思います。何かこれだけが、ということではないと思います。それを考えると皆さんに喜んでもらえるような形で進めていかなければならないと改めて感じました。

ありがとうございます。一通り皆さんからお話をいただきました。他になれば、経過報告については終了したいと思います。

次に協議事項に入ります。今回の協議事項は、帯広市立小中学校適正規模の確保等に関する取り組みについてをテーマとして、現在までの進捗状況について事務局からお願いします。

広瀬 部長

適正規模の確保等に関する取り組みについてご説明いたします。この取り組みにつきましては、少子化が進行する中、子どもたちにより良い教育環境を提供することを目的に昨年2月に策定しました基本方針を踏まえ、同年8月に前期計画期間に検討が必要な学校を選定した計画（原案）を策定したところでございます。この計画（原案）に基づきまして、昨年9月から10月にかけて、前期計画期間に検討が必要な学校として選定した8校の保護者、地域住民及び市民に対しまして、問題意識を共有するとともに、意見交換をする場を設置し、意見交換会を実施したところでございます。意見交換会でいただいたご意見につきましては、本日お配りしております資料3にまとめてございます。いただいたご意見では、一定規模の集団の中で学ぶことの必要性について理解を示される一方で、学校を存続して小規模校のメリットを活かした教育を行うべきとのご意見も多く寄せられたほか、統合により地域から学校がなくなることへの不安感といった声もございました。今後のスケジュールでございますが、意見交換会でいただいたご意見や学校を取り巻く教育環境などを十分加味して検討した上、前期計画期間の対象校を選定し、本年2月の建設文教委員会に計画（案）として報告する予定で現在作業を進めているところでございます。対象校に対しましては再度ご説明に伺い、本計画策定に向けた参考といたします。その後につきましては、今後の具体的な取り組みの協議の場として、対象校に地域検討委員会を設置し、様々な視点からご論議いただき、教育委員会にご意見等をいただき、ご意見等を基に個別実施計画としてま

とめ、実施していくこととしてございます。今後におきましても、保護者や地域住民に対する丁寧な説明に心がけながら、進めていく所存でございます。説明は以上でございます。

米沢 市長

ありがとうございます。本件につきましては、教育委員の皆様にはこれまでも、本計画の策定にあたりましてご議論いただいておりますが、今回貴重な機会でございますので、改めて率直なご意見やご感想をいただきたいと思います。それでは、嶋崎教育長からお願いします。

嶋崎教育長

たくさんのご意見をいただきました。小規模化というものに危機感をお持ちですが、一方で学校の存在というものが皆さんのお気持ちにも表れていると思います。いずれにしても、学校というのは教師と子どもたちだけではなくて、親御さんや地域の方、先ほどの読書の話や見守りなど、多くの方々に支えられて学校が成り立っている現実がございます。そこについては、それぞれいろいろなご意見があると思いますが、それぞれが子どもを中心として、積み上げていくことが第一にやらなければならないこと、それに対して、今どういう状況なのか継続的に情報を出して、こういう形であるということを保護者のみならず、皆さんにわかっていたいただいて、結論を出していただくことが大事だと考えています。一方、そういう状況にある中でそこで学んでいく子どもたちがおりますので、可能な限り教育環境を整えていくことをしていかなければならないと思っております。

米沢 市長

ありがとうございました。同じテーマですので、次は佐々木委員お願いします。

佐々木委員

小規模校のメリットも少なからずありまして、個人の感想としては、学力だけを取り上げると、小規模、大規模は、本当はあまり関係ないだろうと思います。学力を底上げするためという意味だと、適正な規模の確保までは必要ないのではないかと思います。小規模でなく適正な規模を確保する必要があると思うのは、意見交換会でも出ていましたが、部活動について、小規模になると多種多様な部が用意できないので、子どもたちが中学校に入って、これとこれしかないというのは可哀想だなと思います。部活動は教育面でも良い面がありますけれど、それだけではなく、スポーツや音楽や書道など、子どもたちにとって様々な活動への一番身近な入り口だと思っています。面白そうだなと思ってひよんなことから入った部活動が、その後の人生にすごく大きな影響を与えとか、将来の職業になる

こともあり得ますので、ある程度の選択肢を子どもたちに用意してあげなければいけないと思います。そうすると小規模校では難しいと感じました。クラスが1つだと、家族みたいに親密な人間関係ができるメリットはありつつ、上手くいくと居心地が良いのですが、居心地の悪さを感じ始めた子どもにとっては、クラス替えの手段がないと固定化された人間関係から抜け出しにくい。良い面も悪い面もありますけれど、クラスが2つはあった方がいいのではないかと思います。ずっと同じクラスでいくというのは良い面も悪い面もあると思いました。適正な規模を確保するのは重要だと思います。その手段として例えば学校の統合などがありますが、その中で懸念される事の一つとして、通学距離が広がるということがあります。特に低学年の子どもたちにとっては歩くのも負担になりますし、それを負担になると思った親御さんが送り迎えをするとなると、親御さんにとってもかなり負担になるということがあり、もしそういう問題が出てきた場合には、通学バスを用意するなどの手段を講ずる必要が出てくるのではないかと思います。それと、学校にはたくさんチラシ等が配付されていて、適正規模の確保について周知はされていて、説明会や意見交換会などの情報も行き渡っていると思います。これから学校に入学する子どもたちや親御さんたちにとっても重要な問題なので、今後は幼稚園、保育所、子育て支援センター、福祉センターなど、小さなお子さんを抱える親御さんの目につきやすい場所に、何か貼っておくなどの配慮をしていただければと思います。小さなお子さんを抱えている方々はバタバタしているため、ネットで調べたりもしないででしょうし、そういったところに情報があることに気が付くようにしていただければと思います。それから、統廃合だけでなく小規模特認校の制度もあると思います。地域によっては上手くいっているところ、残念ながら上手くいっていないところもあるようですが、上手くいけば、小規模特認校の指定校を拡大していろいろな所から子どもを呼び寄せるということは、その学校の規模を少しでも大きくするという面でも、子どもたちに選択の幅を広げるという面でも、とても有効なのではないかと思います。今は清川と愛国が特認校として、確か2、3人ぐらいつつ制度を利用して区域外通学をしている子どもたちがいるということで、帯広では機能していると思っています。しかし、通うのが大変なので、それが理由で上手く行かなかった地域もあると聞いていますので、通学バスをもう少し増やす等の配慮をすれば、指定拡大後も制度が機能

し、適正規模の確保の面でも良い方向にいくように思ったところです。

米沢 市長
藤澤 委員

ありがとうございます。

私の方からは、学校と地域の関係についてお話ししたいと思います。意見交換会では学校がなくなると地域が衰退するという不安があるという意見が出ていました。適正規模の確保となると現実問題として、地域に存在していた学校がなくなることの意味するもので、寂しいと感じるのは当然だと思います。学校は子どもたちの教育の場としてベストな環境を維持する必要があるのですが、近年は多様化し、複雑化する子どもの教育を巡る諸問題に学校の先生、保護者だけで対応するのは困難になっているのが現状です。そこで地域の方々のお力をお借りして、むしろ主力として学校運営に関わっていただければと私自身は思っています。帯広市では幼保小中連携のエリア・ファミリーとか学校支援地域本部事業、放課後居場所づくり、おやじの会、学校図書ボランティアなどの活動がありまして、これも地域の方の協力の下に成り立っていますが、学校のネットワーク委員会主催でPTA、地域の方々、保護者、OB、生涯学習、青少年育成者連絡協議会の方々が参加して子どもまつりが開催されているところもあります。子どもまつりなどは子ども学校応援地域基金プロジェクトとして基金も活用されておりまして、確実に活動が推進されていると思います。このように先生、保護者、地域の方々を含めた学校づくりを進めているわけですから、適正規模の確保の話になった時に、学校を減らすという真逆のことをやっていると思われる方もいらっしゃると思います。そこで、今、コミュニティスクールの検討もこれから出てくるのかと思います。学校は児童生徒が学ぶという場所以外に、地域コミュニティの中心という側面があると思います。地域と一体となった特色のある学校づくりが必要だと思っています。はじめにお話しした、意見交換会で学校がなくなると地域が衰退するとの意見がありましたが、新しく出来た学校、つまり1つなくなって統合という話ですが、その運営に関わっていただくような形になれば、そのことで地域も活性化していく。そのような方法も考えていかなければならないと思います。簡単なことではないのですが、これからの意見交換会で保護者、地域住民の理解を十分に得て進めていただきたいと思います。意見交換会で地域住民・保護者と十二分に協議を進めてほしい、意見交換会を行って地域の理解が得られたと思って淡々と進めないでほしい、意見交換の場に参加で

米沢 市長
塩野谷委員

きない人や場の雰囲気で見聞を述べられない人などから意見を聞く機会を設けてほしい、などの意見が出ていたようですが、実際にこのような意見を汲み取って、慎重に適正規模の確保を進めていきたいと私自身は思っております。

ありがとうございます。

この度、意見交換会で出されたご意見を見させていただいて、気が付いたことを3点ほど簡単にお話したいと思います。1点目は適正規模化について、2点目は校舎の老朽化対策について、3点目は帯広に戻ってくる教育について。1点目は適正規模化ということ自体、多様な価値観に向けて視野を広げて物事を見ることができるよう人材の育成には、ある程度の規模が必要だろうと思います。先ほど佐々木委員もおっしゃっていましたが、特に部活、中学生、高校生になると重要な要素になると思います。特に今、スマホがどんどん浸透してスマホ社会になると、逆に人と人との活動、それが重要になってくる。そういった意味では適正規模はある程度維持していきたい。しかしながら、少子化によって小規模化は避けられない状況にありますけれど、意見の中で、小規模であるがゆえのメリット、強みを非常に出されていますね。こういった強みをどんどん前面に出していくことに併せて、弱みについては、1ページの一番下にある、小規模校には周囲の学校との交流の場をどう設けていくかという意見もありますけど、例えば、複数の学校での合同での部活動を行うとか、小中の縦の連携だけでなく横の連携も行うとか、小規模校としての弱みを少しでも薄めていく手法を考えていく必要があると思います。2点目、校舎の老朽化対策について、11月の教育懇談会の時にも、トイレの洋式化の問題など様々な意見がありました。確かに私も何十年ぶりでいろいろな小学校に行きまして、ずいぶん老朽化が進んでいると思いました。これを改修・修理しながら使っていくという計画でありますけれども、いずれにしても何年か先には新しく建設することになるのではないかと思います。また、新しく建てるとうちまたさらに長寿命化と言われると思いますから、さらに将来を見据えた配置、あるいは再配置を考えて行かなければならないと思います。それは今後のまちづくりとも大きく関連してくるわけです。人口減少社会では、コンパクトシティ化の方向に進むのが良いと思いますが、それに併せた都市計画を考慮した上で長期的な展望の下に計画的にこの問題は考えて行くべきであると思います。3点目は、意見の中にも、義務教育の間に帯広に愛着を持てる

教育を行ってまいりたい。地域、保護者、教育委員会が一緒になって帯広に戻って来る教育を目指したいとあります。まさに私も同感であります。帯広市においても少子高齢化が進んでおり、若い働き手が非常に減少してきている。地域の担い手不足が予想されるわけですから、一部ではそれが現実化していると言ってもいいかもしれません。実際、子どもが少なくなつて、さらに進学で働き手が少なくなる。進学と言っても札幌や関東、東京などに進学して、将来、その子どもたちはすぐに帯広には帰ってこないと言います。例えば、札幌に進学し、卒業したら刺激があるから、そこで就職したい。若い人の気持ちを考えるとわかりますが、そういうケースが多いらしいです。帯広から一度離れても、将来、帯広に帰ってきたいと思える取り組みが必要ではないかと思ひます。昨年 10 月に、翔陽中学校 2 年生が総合的な学習の時間の中で職場体験学習を実施したいということで、帯広商工会議所に生徒の受入依頼が初めてあったのですが、19 企業で 55 名受入れたという報告を聞いております。そのようにして地元帯広にある企業、会社を知ってもらい、興味を持ってもらい、それが将来就職を考える時に、まちに戻るきっかけになれば良いと思っています。そういった意味でフードバレーとかちの下に、十勝・帯広の優位性や可能性を伝えていくとともに、今言ったような活動をどんどん進めていったら良いと思っています。以上です。

米沢 市長
田中 委員

ありがとうございます。

ここ何年も議論がなされていまして、やはり、議論して解決していかなければならない問題だということは共通認識があると思います。ただ、当たり前の話なのですが、十勝・帯広に限らず少子化はどこでも進んでいて、放っておくと間違いなく子どもは減っていくということは確かで、プラス、100 年時代と言われているように、高齢者はどんどん増えていくことは間違いのない事実です。そこでどうやって子どもたちの教育環境を整えるかという話です。そこについては皆さん合意が取れるだろうと思います。その上でいろいろなメリット・デメリットということも考えていかなければならないと思います。先ほど佐々木委員からもお話があり、私もそう思うのが、クラス替えのない規模が果たして適正かどうかということは議論しなければいけないと思います。これは様々な問題があります。一番大きな問題である多様性をどうやって認めることができるかということに関して言えば、やはり 1 つのクラスで小学校、中学校ま

で一貫して9年間行ってしまうのは、果たして子どもたちにとってメリットがあるかどうかということかと思います。それから、先ほど話が出ていましたが、部活の問題もそうだと思います。私や市長や塩野谷委員の時は、野球だったと思いますが、サッカーはもう少し下の世代でしたけれど、野球をやるためにはどうしても9人が必要で、メンバーが揃わないというのはどうかと思います。それからもう1つは、最近言われていることで、アスリートの低年齢化があり、14～15歳でどんどん世界で活躍できるような素材が揃っているということとか、あるいは、今よく言われているゴールデンエイジの問題などということ、つまり、小学生低学年とか、そのぐらいの時からある程度スポーツにはどんどん関わっていった方が良いでしょうと考えていった時に、それに適する環境を与えてあげないといけないと思います。そういう意味でも、必要だろうと思います。もう1つは、教員間の切磋琢磨という言い方が良いかどうかわかりませんが、そういう観点からも、特に中学校ででしょうか、1つの教科に複数の先生が配置されるような状況を作らなければ、人間はどうしても安きに流れますので、自分よりも素晴らしい先生がいれば、少しでも追いつこうと努力をするということもあると思います。そういったことを含めていけば、適正規模、適正配置の問題は避けて通れないのかなと思います。ただ一方でやはり、先ほどもお話しましたけれども、地域の協力・連携がなければ、成り立たないということは間違いのない事実で、特に今、学校教育に関しては地域と社会と保護者の3つが連携しなければいけないという中で、そのうちの1つの位置を占めているわけですから、やはりそういう部分では大事だと思います。それから、歴史があるということがあって、昨日今日建った施設ではないので、それぞれの地域の方々思いや熱意がこもっているということもありますので、そう簡単にはいかないだろうと思っております。ただ、先ほども言いましたが、放っておいたら、その地域にだけ子どもがいなくなる問題ではなくて、帯広にもいなくなり、十勝にもいなくなり、北海道にもいなくなるということ俯瞰的に考えていかなければならない時代になっていると思います。悩ましいことは多々あることは理解しておりますが、そうなってくると、当たり前のことなのですが、お互いの考え方、相手の側に立って考えていく、勿論行政や市教委側も地域の方々のことを理解するように考えることができているか。また、地域の方々も本当に子どものことを考えていった時にどうなのかということ

考えていかなければ、なかなか解決できない問題ではないかと思って、この間の議論を聞かせていただきました。そうは言いながらも、義務教育 9 年間ですので、6 年 3 年制ですので、放っておくと 1 年、2 年、3 年経てば、それだけ子どもたちもどんどん大きくなってしまいます。これは大人の責任の問題として問われてくることになると思いますので、どういう形にせよ、しっかりとした議論を踏まえて、考え方を固めていく必要があると思っています。以上です。

米沢 市長

大変多岐にわたるご意見をいただきまして、なるほどと思いながら聞いておりました。少しだけコメントさせていただきます。順番がばらばらになってしまうかもしれませんが、まず、塩野谷委員からのお話については、帯広に愛着を持てる教育、そして故郷に戻ってくるような教育をきちんとして、子どもたちが将来戻って来るといようなお話がありましたけれども、将来的な U I J ターンにつながる大変重要なポイントだと思います。まず、情報をちゃんと整理してわかるようにしなければならぬと思います。帯広に帰りたいなと思った時に、仕事があるのかどうか分からないということは一番あってはいけないことだと思いますので、そういったデータをきちんと揃えていかなければならぬと思います。それから、学校を卒業したばかりの子どもたちは、どうしても大企業志向ですし、都会志向です。別のテーマで選択肢というお話もあったと思いますけれども、すべてが良いものはないということにちゃんと気がつくように、何を大切に選ぶのかといった時に、大切にしたいもので並べ替えてみて、選択肢がなかったときにその選択肢の中にこの地域が入らないということではいけないと思います。そういうものを我々はしっかり発信していかなければならぬと思っております。先ほどのテーマにしても、学校教育、社会教育、この辺もしっかり一層連携と充実を図っていかなければならぬと思います。ちょっと甘い言い方になるかもしれませんが、こういう殺伐とした人と人との関係が薄くなっている時代にあって、地方にいる我々がもっと意識しなければならぬのは、人間関係の温かさとか優しさとか皆が親切だとか、何かそんなことが実感できる社会をつくり、小さな時から見せておかなくちゃいけないということ。そういうものを子どもの時に見て育った子が都会に行って、いろいろなことにぶつかった時に単なる懐かしさではなくて、人間らしく生きようと思ったら、あそこも 1 つの選択肢だと思ってもらえるような社会を作っておかなければいけなくて、そこが殺伐としていたら、良いとこ

ろがなくなってしまうじゃないかと思いながら聞いていました。それから、適正規模の確保について、皆さんからそれぞれお話をいただきましたけれども、特にそれぞれの学校ががんばっていろいろなチャレンジをして、歴史を作ってきています。それを無視されたかのように思われる統廃合というのは、ふざけるなという話になりますよね。まさに相手の気持ちがわかるようにという話をしましたけれども、そんなことを言うておきながら、こういう作業をしてはいけないと思います。ですから、小規模校には小規模の良さがある。しかし、エリア・ファミリーもこうしてやってきた。そういう丁寧にしっかりと積みあげてきたものに、我々は自信を持っていかなくちゃいけないと思いながら伺っておりましたし、やはり地域の方々のご意見は大変重要だと思いました。しっかりと議論していく必要がある。これも個人的な経験で申しわけないのですが、気をつけなくてはいけないのは、大人が俺たちの時代も、人数が少なかったんだからいいという声を聞きます。つまり、この辺の話の危なさというのは、人数が少ないのはこんなデメリットがあるんですよという、そこで生きて大人になった人たちにとっては、彼らのキャリアや人生を否定されたような気分になると思うのです。だからその辺の説明の仕方というのは、納得感を持ってもらうために、まず、相手の人も私たちも、皆同じく、子どもたちのためにということに歩み寄ってきてもらう、入ってきてもらうためにも、壁を作っちゃいけないなと思います。だからそういうところも丁寧に説明してまいりたいという事務局からの話もありましたけれども、制度の説明だけではなくて、そこにいる人たちがその事実なりを聞いたときに、どう感じるのかというところまで入った議論をしなくちゃいけないと思いました。いずれにしても全員が満足する結論は、なかなか難しいということは誰もが感じていることですが、だからといって止めるわけにはいかないのです。何人かの委員からお話がありましたが、時間軸ってすごく実は大切だと思います。ビジネスの社会では、収益と時間軸で物事が決まっていきますよね。だから時間軸というのはものすごく重要なものですが、行政からみると、時間軸が大切だと言いながら、それは短ければよい、ということの大切さではなくて、時間をかけ、しっかり議論を積み重ねることが是とされるという感じがこれまでであったのではないかと思います。確かに拙速であってはいいませんが、ただ、気がついてみたら10年経ちましたというと、9年前に小学校に入った子はもういな

いわけですよね。その間、あの議論は一体何だったんだということになりますので、やはり常に時間ということ意識しながら、議論を進めていかなくてはいけないと思いますし、その議論をされている間の子どもたちは、置いてきぼりというか、その間は仕方がないというのも、何か無責任な感じがして、こう簡単に言うこと自体が無責任に聞こえたら大変申し訳ないですけども、そんなふうに考えながら聞いておりました。いずれにしても納得感を作っていくことがとにかく重要であるというのは、何人もの皆さんに言っていたいたと思っています。それで、皆さんに伺ってみたいと思っているのは、納得感は確かに必要だと思いますが、一方では、全員が満足することはなかなか難しいのではというご意見もあったかと思います。そうすると、納得感を得るために我々は、これから何をやっていけばいいのかと思うのです。立場もそれぞれ違う人たちだと思っていますが、ともすると立場の違いを意識しないで議論してはいないでしょうか。結論を言っちゃいけないと思いますけれど、最近よく言われる多様性と言いますけども、実はもう1つ語尾に付くのです。多様性を受け入れるということです。意見の違いがあることを受け入れて、その上で途中で切れちゃって、いや生物多様性だからということで切っちゃう議論が多いのですけれどね。何かこの辺にも我々普段の市長部局の議論でも同じようなことに会いますけれども、信頼関係を築いていく時に、今皆さんは仕事をして、それぞれご専門性がありますけれども、こんなことに気をつけたらいいとか、また、今日は適正規模の取り組みということで、いろいろな当事者に話をしてもらおう、また参加してもらおうのだけれど、無責任ですが、今日ここで結論を出せるとは思っていませんが、どの辺が肝だと思いますか。変な質問で恐縮ですけど、どんなことをお感じになりますか。

田中 委員

私から言わせていただきます。今の市長のご質問は非常に難しく、僕も自分の現場でしょっちゅう学内の声とか、結局はお前が決めただけみたいな話になってしまうものですから、困ったなと思っています。何点か思いつくままメモしていました。1つは、繋がるかどうかわかりませんが、18歳、19歳の十勝出身、また、帯広の子たちというのは、十勝をものすごく愛しています。他の地域に比べても格段の違いがあります。先ほどどなたかがおっしゃっていましたが、できれば戻ってきたいと感じている。環境整備については、管内の各首長を始めとして、何とかしていただければとい

う話ですけれども、まず、これは十勝なり帯広なりに関して、若い人たちはすごく信用しているし好きなのだと思います。信用という言葉が一番良いかもしれません。大好きだと思います。どこか一度外に出ても、やはり十勝・帯広の方が良いという思いがある。単にこんなに若くして郷愁が湧くとは思えませんが、そんなふうに思っています。これに対する答えは大人の問題になってくるというのが1つあります。それからもう1つは、どれだけ議論しても、なかなか最後はお互いが我慢して、決まったことに対しては覚悟を決めて皆で一緒に走るということを共通の理念にしなければ、上手く行かなかった時に、そこで、だから言っただろうという話になってくるので、ここをどうやって詰められるかということをいつも考えていて、個人的には自分で決めたり何なりしたことには覚悟を持つという、最悪のケースを考えるということをいつも思っています。それから3つ目は、他者は基本的にはわかり合えないだろうと私は思っています。それをどうやってわかり合っていくかということに考え方を変えていった方が良いと思います。かといって、相手も皆が皆、極悪非道な人ばかりでは全くありませんので、むしろ、皆同じ様なことを考えて、同じ様な改革をしたいという中での意見の違いになりますので、やはりそこはお互いがお互いをどうやって考えるか、つまり最初の話になりますけれども、他者のことをどれだけ理解してあげられるか、ダイバーシティの話でしたけれども、そこにかかってくるのではないかと思います。最後に、それを全部ひっくるめて、帯広の子たちは十勝・帯広に対してとても愛着や信頼があり、信用があるということについて、つまり、きっと教育はうまくいっているのだらうと思います。それをもっと充実させて実践していく必要があるので、それがこれからの地方のまちづくりとか、地域づくりとか、人づくりの骨格になってくるのかと思いながら、今お話を伺っていました。

嶋崎教育長

信頼ということとは違っていたのですけれども、河合薫という、エッセイなどをよく書いている方がおられますが、その方が、説得とか言葉というものはすごく大事だけれども、実際にそれ以外にも笑顔とか、うなずくとか、相手の方を真っ直ぐ見るとか、信頼関係の基となるのは、相手方ときっちり向き合っていると、まず思ってもらふこと、ということが書いてあるものを読みました。先ほど市長がおっしゃっていたように、地域の方、PTA、町内会の役員と、人は多面的なものですから、どの場面でどうかというのは、やはり

全体の中で判断する場合があります。そこだけでまず判断をしないこと。もう少しいろいろなレベルで、もう少し細かくしながら積み上げていくということ、きっとそういうことが納得感とか、そういうものに繋がるのではないかという気がします。

米沢 市長

今の話で、先ほども少し言いましたが、正しく分かりやすく短く喋るとありましたけれど、それにもう1つパッケージが付いたの、ちゃんと相手の目を見て話すというものでした。自分で反省すると、どちらかというと役所の仕事は書類を見ながら相手の目を見ないで、どうしても取れるような長い文章で簡潔に説明しないという。この辺がもしかすると、普段、何となしに、そういうところで、喋り方とか聞き方、相手との対峙の仕方、そういうことが入口のところで1つの妨げになっているかもしれないと思って聞いていました。先ほど田中委員の話で一番なるほどと思ったのは、自分たちがここでやってきたことに自信を持って、何かを決めていく時は、わからないから怖いけれども、地域として覚悟を持ってそこに入っていくということを皆で共通認識すること。絶対大丈夫だからとやってしまうと、おかしくなってしまう。こんなわからないところもあるけれども、これ以上延ばしておくということになってしまう。だからまだ、確信的ではない部分もあるけれども、それを確認しながらここからこうやって進めていかないか、というような課題に対する姿勢を納得感というのでしょうか。正しい回答どうかというのは身内では分かりませんから、証明できない。その辺はどうしても役所と何かやるときに最善とか絶対とか正しくとか、言ってしまうから前に進めなくなっていくので、違ったら変えられるんだという軸を入れてくると、もう少し話が進むのではないかな、とお二方のお話を聞いていました。他の方はどうですか。

藤澤 委員

私は病院の臨床検査技師で、検査を担当しています。医療機関における信頼関係は、医者と患者ということ为例に挙げてお話しさせていただきたいと思います。患者さんは医者に命を預けていますから、そこに信頼関係が成り立たなければ、治療してもらっても納得がいかない状況になります。ですから、本当に目的というか、体質的なもので、医者は治す、それで患者は治してもらいたいということで、目的が本当に集約されています。一般とはまた違ってきますけれど、医者と患者もそうですし、医療スタッフ、看護師とか薬剤師とかいろいろいますので、それぞれ業務をきちんと行い、医者に情報を提供するとか、患者さんに対して治療するのに助言と言い

ましようか、仕事に取り組むわけですがけれども、結局、患者さんを治すという目的は一緒です。ですから、単純かもしれないですが、他に置き換えると、目的をこうしたい、ああしたいということを一応確認する。そこからいろいろとすり合わせていくと、随分とお互いのことを分かって、分かり合いながら進めていけるのではないかと、今聞いていて思いました。もう少し医療関係のことをお話ししようと思ったのですが、そうじゃなくて、本当にそこですね。本当に患者さんを治したいというのが、職員もスタッフもみんな同じ気持ちですし、患者さんは治して欲しい。そのところがちょっと目的意識が違うと言いましようか、確認と言いましようか、そこから考えれば、やはり子どものことを考えて、そこから子どもが社会に出て行く時に、また、貢献してくれるとか、地方創生もそうですけれど、全部に関係していきますので、その辺のところのすり合わせると言いましようか、再確認すると言いましようか。分かりづらくてすみません。

塩野谷委員

まさに今の考え方に賛成です。私も事業をする上で社員はそれぞれ経歴も違うし、若い子の親くらいの年齢なわけです。いろいろな人の集まりですが、1つの事業を行っていく上でやはり企業理念、あるいは方針ということを共有して、理解してもらって、やはり目的、あるいは使命は1つでないと、目的が分散したり、多様化したりすると戦力が完全に壊れてしまう。重要なことだと思います。やはり企業にとって、組織にとっての目的があるわけですから。使命をきちっと理解してもらわないと。特に企業の場合はたまに目的と手段を勘違いしてしまう。利益が目的になってしまうことがあるが、利益は条件ではあるけれど目的ではない。利益を目的にしまうと、不正や偽装問題が起こることもある。そういった意味でまさに藤澤委員の言うとおりでと思います。

米沢 市長

価値というか、皆が共有して持たなくてはいけないもの。今回の取り組みに対しても、そういうものをきちんと皆で確認し合って進めること。佐々木委員からは何かありますか。

佐々木委員

そうですね、塩野谷委員がおっしゃった目的の共有というのはものすごく大事なことでと思って聞いていました。一緒に何かをやったり、意見を対峙させたりしながら物事を進めていく時に、あれ、何か違うんじゃないと思うこと、例えば相手に不信感をもたれる瞬間はいろいろあると思うんですが、1つは、同じ目的に向かって皆で何かをやっている時に、主に進めている方々が、その目的の

ための手段が目的化しているんじゃないかと感じられる瞬間が1つの信頼関係にひびを入れる瞬間だったりするのではないかと、何かちょっと盲目的にそれに向かって進んでいるけれど、何のためにやっていたのか分からないと思われた時に、例えそうではなくてもそう思われた時に、そこで時間軸の問題もあるにはあるのですけれど、そもそも論というのを嫌う方も多いのですけれども、そもそも論をあまり嫌がらずに、節目節目で確認をして、私たちは同じ方向を向いていると、多少ばらばらな方向を向いているところもありますが、大きくは、今の問題で言っても、子どもたちのため、子どもたちの適正な、より良い教育環境のために動いているということを、節目節目で確認していき、確認だけではなくてきちんと明確に皆に見せるという作業がすごく大事ではないかと思います。もう1つは、当事者間と言うと変な響きかもしれないですけども、やはり人間は、蚊帳の外にされて何か分からないところで物事を進められるというのは皆嫌いですから、余程信頼している人が進めるのであれば、あの人の言うことなら、良いかと思われるかもしれないですけども、やはり、何か良く分からないと思われるのはまずいと思います。ですから、意見交換会でも、そういう意味ですごく大事なものだと思いますけれど、ただ聞くというだけではなくて、あなたたちの意見が必要です。必要だから聞いているのです。聞かなきゃいけないから聞いているのではなくて、これを進める上で皆さんの意見が本当に必要だから聞くということ、聞く態度のお話というのは共通すると思いますけれど、聞いてあげるのではなくて、そういう姿勢でもって皆さんのお話をお聞きすると、そこで喋った人たちは参加しているという感覚を持つ、聞いてもらっているのではなくて、あるプロジェクトを進めるにあたり、私たちも参加しているという当事者意識を持つことができますし、そうすると、例え、多少自分が望んでいた理想の結果ではないにしても、私たちが参加して皆で話し合って、私にはちょっと不満だけれど、こういう結果になったのなら仕方ない。言い方は悪いですけど、妥協ができるということ。信頼関係において妥協できるという形もあると思いますので、とても大事だなと思いました。

米沢 市長

ありがとうございます。皆さんのお話を聞いていて、昔教えて貰った言葉を思い出しました。シリコンバレーで仕事をしていた時に、とても重要な言葉として、“We are on the same boat”今まさに佐々木委員が言っていたのはそのことで、

1つ目も2つ目も足したら同じになると思って聞いていたんですけど、皆が同じ運命共同体の船に乗って、こういうことを今考えているということを忘れそうになった時、ちゃんと俺たち一緒の船なんだということをいつも確認していかないといけないのだろうと思います。それが違った構図で議論をすとか、そういうメッセージが伝わらなくて、参加したのに不愉快だったとか、そういうことがもろもろ出てきて、信頼感から不信感になったり。時間をオーバーさせてしまい大変恐縮なんですけれども、大変貴重なご意見を聞かせていただいてありがとうございました。いずれにしても、今回の計画については、今後も保護者、そして地域、まさに今、相互理解とか当事者意識という言葉いただきましたけれども、大変重要だと考えています。よろしくお願いします。その他ということですが、皆さんお話ございますか。事務局から連絡事項ありますか。

事務局

私の方から、今後の総合教育会議の開催の予定なのですが、今年度につきましては、今回のみとさせていただきたいと思いますので、お伝えさせていただきます。

米沢 市長

それでは、以上をもちまして平成29年度第1回帯広市総合教育会議を終了します。